

日英両国語比較 (XXVII)

馬 場 熙

A Comparative Study for Japanese in Learning English (XXVII)

Hiroshi Baba

Abstract

It is natural for us to think that the first man whom the Logos made was an educated human being who possessed a human language. The word “called” was the first verb used by the first man.¹⁾ A verb is the central and grammatical element and one of the essential parts in biblical English and Japanese sentences. Every sentence has two parts, a subject and a predicate. And every predicate has a verb. Several verbs are discussed in this paper.

Key Words: Biblical Japanese, biblical English, subject, predicate, verb.

世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません。/ There are, perhaps, a great many kinds of languages in the world, and no kind is without meaning.²⁾

V. 基本資料³⁾における主語に対する動詞と周辺要素の意味と構造関係について

1. はじめに

人間がこの被造物の世界に高度な生命体として出現した瞬間から、人間は創造主から言葉を賦与された事は疑いのない事実である。高度な被造物生命体である人間は、全被造物の最後に造られて、最後に造られたこの被造物にのみに言語が賦与され、対象物を認識・認知して考察する能力を有するようになったのである。他の被造物には、人間が意志疎通の道具として使用するような言語は与えられなかったのである。動物等の鳴き声は、言語文化概論的には、「言語の代わり」の範疇に入っている。例えば、チンパンジーは音声言語を学ばず事は出来ないが、反応する事は出来るのである。動物は、警戒感が鳴き声に表れて、群れの仲間にその警戒感が伝わるのである。これは「伝え合うのではなく、伝わるのである」というのが言語文化概論的定義である。この言語文化概論的言語の定義は、「ある集団の人々が共有する『一次的には音声、二次的には文字を用いて、感情・情報・要求などを伝える機能を果たす、社会的集団に定められた記号の体系』についての知識または能力。」とあるように、言語能力に基づいた伝え合う能力はないという見解である。

最初の人類は土のちりを素材にして、成人男性が造られたのであった。この最初の人類を第一の人間と呼ぶ事にする。次に生命の氣息を創造主によって鼻の穴より吹き込まれて、この被造物が高度な生物体としてこの世界に出現したのであった。第一の人間の鼻を通して生命の氣息を吹き込まれた瞬間、彼は「理」と「言」を兼ね備えた「LOGOS」をも同時に与えられ

たのであった。この LOGOS はギリシャ語の表現で、下記の新約聖書ヨハネによる福音書の冒頭に用いられている語彙でもある。

The *Logos* existed in the very beginning, the *Logos* was with God, the *Logos* was divine. (Jn.1:1, *The New Testament, A New Translation*) [Cited hereafter as *ANT*.]

このギリシャ語の“LOGOS”について、英語における辞書の意味には二つの意味が示されている。第一義は、「合理的・本質的に宇宙を統括し発展させている根本原理」で、第二義が「神の言葉または理性（思慮）がイエス・キリストに受肉している」で、英語辞書では前者が、哲学用語として“the rational principle that governs and develops the universe”という哲学的意義を提示し、後者は“the divine word or reason incarnate in Jesus Christ. John 1:1-14”として神学的意義を提示している。さらに語源的由来として、ギリシャ語から来ている事を提示していると同時に、英語で九つの語義を示し、その意味を掲載しているので、ここに再掲しておく、それらは次の通りである。1. a word, 2. saying, 3. speech, 4. discourse, 5. thought, 6. proportion, 7. ratio, 8. reckoning, 9. akin to *legein* to speak⁴⁾ 一方英和辞書では、次のような定義が示されている。第一義は哲学用語として、「(古代ギリシャ哲学で) ロゴス、理法：宇宙を支配し展開させる一定の調和・統一のある理性的法則」。第二義は、神学用語として、「(イエス・キリストにおいて人となって語った) 神の言、ロゴス；(三位一体の第二位である) 聖子、キリスト」とし、さらに「聖書のヨハネの福音書1章1節、14節を参照せよ」という指示を出している。さらにギリシャ語のロゴスの意味を日本語で表記しているのも、それらをここに掲載すると次の通りであった。1. 言葉、2. 言うこと、3. 談話、4. 論説、5. 考え、6. 割合、7. 比、8. 計算、9. (*legein*)「選ぶ、集める、話す」と同根⁵⁾としている。英語で“LOGOS”は“WORD”と表現される。逆に“word”の項目を英英辞典(*The Random House Dictionary of the English Language*, s.v. “word” [Cited hereafter as *RHD*.])で参照すると、第九義目に同義語が掲載されているので、ここにそれらを再掲載すると次の通りであった。大文字で書かれた場合の意味として“Word”は、“(cap.) Also called the Word, the Word of God”で、そこから三つの意味に分かれている。第一は、“the Scriptures; the Bible”で、第二の意味は“the Logos”で、第三の意味は、“the message of the gospel of Christ”を示している。今度は“word”の項目を英和辞典で参照すると、第十番目の意義として、“word”という語に定冠詞が付されて“Word”が大文字の場合、三つの意味を提示している。第一の意味は「聖書 (the Scripture, the Bible)」、第二の意味は「ロゴス (the Logos)、言」を提示し、参照として〔聖書〕*John* 1:1-4,14. を指示している。第三番目の意味として、「神の言葉、キリスト嘉信、福音 (the Word of Godともいう)」としている。⁶⁾ 第二番目の人間として、最初の成人女性が成人男性のあばら骨を素材にして造られたのであった。成人男性と同様に、第二番目の人にも、鼻の穴を通して生命の氣息をふき入れられた瞬間、彼女にも言語が与えられたのであった。創造主が人に言語を与える事ができた根拠はどこに見出されるのであろうか。人は、一般に、言語は与えられたものではなく、生まれた時からごく自然に学習していくものであるという事のみ執着すると、言語が持つ本来的・本質的属性を見失ってしまう可能性が出てくるのである。言語は、人間が生まれる前から存在していて、その人間がこの被造物の世界に誕生する事が創造主によって意図されそうして計画された時から、その人に意思疎

通を図るための道具としての言語が与えられたのである。その根拠は、言語の中核と本質を担っているのが“THE LOGOS”または“THE WORD”であるという事に他ならないからである。即ち、創造主の言葉と人々の話す言語には、本来的には分離できない属性が存在しているのである。この本質的結合関係を前提とする事によって、言語の本来的役割と言語の根源的属性に迫って行く事が出来るのである。理由は、人間はこの地上に偶然出現したのではなく、また猿から進化して、人が出来上がってきたのではないからなのである。再言及になるが、人は土の塵によってつくられたのである。土の塵は地球の陸地の土を構成しているきめ細かい粒子である。英語の表現は“dust from the ground”で、「人 (man)」と組み合わせた名詞語句は、「土の塵の人 (man of dust of ground)」となる。この語句を辞書的意味の角度から考察してみると、「人 (man)」の語源的意味は、「アダム (Adam)」と同義でヘブライ語より発生した語で、「健康な血色の (ruddy)」であり、その同義は「人間 (human being)、個人 (an individual)、人類 (the species)、人類・人間 (mankind)」である。前置詞の“of”は、構成要素を示すもので、英語で表現するならば「…から成って (made of)」となる。日本語では、「土の塵から成る人 (man who is made of dust ground)」である。次に「塵 (dust)」は、ヘブライ語では「アファー (Aphar)」で、その辞書的意味は「塵 (dust)、土の微粒子 (fine particles of earth)、乾燥した土 (dry earth)、きめ細かい塵 (fine dust)、土壌 (soil)、壤土・ローム (loam)、粘土 (clay)、決まった形のない固く小さな土の塊 (lumps)、土などの塊 (clods)、地面・土地・土壌 (ground)、大地・土・土壌 (earth)、いつか死ぬ運命の人間 (mortal)、灰 (ashes)、たくさんのごみ・くず (a heap of rubbish)、粉末 (powder)、金粉 (gold dust)、墓・棺おけ (the grave)、この世界 (the world)」などである。「通常のヘブライ語の意味は、塵またはくずれやすい土(The usual meaning of the Hebrew word “aphar” is “dust” or “loose earth.”)」である。⁷⁾

細かい粒子の土などからも構成されている陸地は、地を覆ってぐるりと取り巻いている大量の水の層が二つに分かれて、体積的・面積的に水が移動した結果、ある空間が生じた事によるものである。空間の下の水を、「大空の下にある水 (the waters which were below the expanse)」と呼び、空間の上の水を「大空の上にある水 (the waters which were above the expanse)」と呼んだのである。ここでは大量の水の層の間にできた空間が「大空 (the expanse)」と呼ばれたのであった。水の上に空が存在したという事は、空の下には水が存在していたという表現で示す事が出来るのである。陸地は、空の下の水の層が面積的・体積的にある方向へ動く事によって陸地が出現したのである。ここでは大量の水の層が全体的・全面積的・全体積的に下方向へ動く事によって、陸地が現れたと考えられる。同時に空の上の大量の水の層も、この時点で、上方向へ全体的に移動したと考えられる。上空の水と空の下の水が、それぞれ反対方向へ移動する事によって、大空が出現したと考えられる。本来、水の上の空間も水の下空間も同じ空間を指すのであるが、この空間は存在しなかったのである。その空間が存在するようになったのは、再言及になるが、最初は大量の水の層が地を覆っていたのである。地を覆っていた大量の水の層は、自然と二つに分割したのではなく、超自然的な力によって上と下の水の層にわかれたのである。水と水が分離される前は、一つの水の層のみが地を覆っていたのである。この一つの水の層は「深い水 (“the deep waters” or “the waters of the great deep”)」と表現されているのである。この「深い水」というのは、聖書言語的表現である。この聖書言語的表現である「深い水」の中に、光が出現したのであった。光が出現する前は、「物理的には目に見えないある力または超自然的力が深い水の層の上をまわりつづくように動いて

いたのであった (the supernatural power, which is invisible to the naked eye, moved upon the surface of the waters of the great deep)」と解釈される。

光が出現したという事は、光が出現する前は、深い水の層および深い水の層の内部は、完全な暗黒であった事になる。「この時点で地は形のないものであった (at this point in the creation of the universe the earth was formless)」ので、日本語では「地球」とは呼ばずに、丸い形になる前の呼称として「地」と呼ばれたのであったと推察できる。従ってこの段階における「地は形がなかった (the earth was formless)」は、「一つの事実を示しており、古代人が言うように、昔は人々が地球が丸いとは思っていなかった (In a sense it is true that in old times people did not think that earth is [was] round.)」とも言える要素を部分的に保持しているのである。しかし基礎資料の英語では“the earth”が使用されているし、欽定訳の英語でも“the earth”が使用されている。英語の“earth”の物質的な意味は、大きく分けて三つの意味を提示しているのが「カレッジライトハウス英和辞典」(竹林滋、小島義郎、東信行編、研究社、1995年)である。第一は「地球、世界」で、第二は「台地、地面」で、第三が「土」となっている。一方、*Dictionary of Bible Words* (Stephen D. Renn, Hendrickson Publishers, 2005)によれば、“earth”のヘブライ語は“eres”で、その意味を英語で表記すると“earth,” “country,” “land”等であり、「地」の言語的意味は「一般的な意味として、神の創造物の事を言い、人間と神の活動の舞台 (“eres” refers to the earth generally as the product of God’s creation, the arena for both human and divine activity)」である。別な次元での意味は、「神の創造の業とその後に続く神の裁きと祝福の意味 (This is the especially the case throughout Gen.1-11, where “eres” is the focal point of God’s creative endeavors and of subsequent judgment and blessing.)」である事が提示されている。「地」の他に水と水の間中に位置する大空ではなく、大空を上回る超広大な第三次元の空間領域の呼称としての大宇宙が、「天」という表現となったのである。この「天」は英語で“the heaven”又は“the heavens”というように、単数形・複数形の両方が使用されているのである。複数形の“the heavens”の意味は、「諸々の天」の意味を表わしているのである。この複数形の「諸々の天」は、第三次元の大宇宙に加えて、第四次元世界をも含めているのではないだろうかと考えられる。「天」そのものを「天」として最初に呼称したのは、「大宇宙」または「天」の設計者という事になり、定冠詞を伴った二語での「天」に関する英語表現は、“the heaven”となり、「天」を代表して表現するならば“the heaven of the heavens”となるであろう。天の「設計者」を聖書言語で表現するならば、その呼称は「創造主」という事になり、英語の表現は、“the Creator”となる。この「創造主」は全被造物の作り手という事になる。それではいつ「天」と「地」を設計・創造したのかという時間的な表現として「はじめに (in the beginning)」という副詞表現の言葉が使われているのである。この副詞句表現を文の拡大理論に基づいて表現するならば、「天と地の創造の歴史の初めに (in the beginning of the history of the creation of the heaven and the earth)」となるのである。人間の創造から言語の賦与、そして「はじめに」という副詞表現に至るまでの過程を述べる事が出来たのは、大前提となる、論理的過程の存在があったからである。換言すれば、聖書の日本語と英語の比較(対照)を論ずる場合、その論理思考の出発点は上述の副詞語句の表現を大前提とする事が要求されると同時に、その過程を論述する事が出来るところの大前提となる根拠は、次の創造表現の節に基づいているのである。

- (1) a. 初めに、神が天と地を創造した。(創1:1)
b. In the beginning God created the heavens and the earth. (Gen.1:1)

上の例文を日英両国語比較の観点から考察すると、「初めに (In the beginning)」は、前述したように時を示す副詞機能で、動詞「創造した (created)」を補足説明する語句であるにもかかわらず、名詞主語機能を有する主語である「神 (God)」の前に置かれる事によって、意味論的には「時」に強調点が置かれた副詞強調型文であり、主語の後には動詞「創造した (created)」来て、主語すなわち動作者がどういう行動をとったのかという事を文全体における述部を形成する(形作る)主要な役割を担い、さらに動詞自体が他動 (transitive verb) としての機能を有しているのである。「創造した (created)」が、他動詞と言える根拠は、動詞「創造した (created)」の後に、名詞語句 (noun phrase) を形成している「天と地 (the heavens and the earth)」がきているからである。この名詞語句によって動詞が他動詞と言える根拠は、二つに絞る事ができるのである。第一の根拠は、意味のある機能的動詞区分動詞が他動詞の機能を果たす場合、機能的範疇区分の第一分類項目の範疇区分に、品詞項目の一つとして「動詞」項目が入り、第二分類項目の範疇区分に三つの機能的特徴に分けた項目の一つとしての一般動詞 (他の二つの項目は連結的・機能的動詞と助動詞) であり、第三分類項目の範疇区分として細かい機能特徴である他動詞・自動詞の区別項目になる。それに基づいて次の領域の文法特徴が決定されるのである。ここで言う文法特徴というのは、前項目が他動詞であるならば目的語が動詞の後に伴い、自動詞であるならば目的語が潜在化しているのか、あるいは他の品詞が目的語を先導しているのかどうか (この場合前置詞や副詞が動詞の後に来る事があるが) を、判断するのである。この時に、各分類項目の範疇区分に接する度毎に意味特徴を認識・考察しながら文法機能を判断する事は言うまでもない手続きである。理由は文法機能と意味特徴を分離する事は不可能なのである。主語である動作者の動作または状態を表すのが動詞の機能的特徴である限り、動詞の「創造した (created)」という動作が、意味的特徴として造作動詞の範疇に分類された後、初めてその動詞の最終的意味特徴が決定されるのである。動詞に限定して要約すれば、第一に単語があり、第二に単語の品詞 (この場合は動詞) を決定し、第三に他動詞であるか自動詞であるかを決定し、第四に動詞の後に語が伴うのか伴わないのかによって、最終的に意味特徴を決定するのである。

- (2) a. 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。(創1:27)
b. And God created man in His own image, in the image of God He created him; male and female He created them. (Gn.1:27)

上の例文は人間の生存は創造主より吹き込まれた氣息によって可能となり羅森万象 (all nature) を認識・認知して、言語を媒介して自らが認知した対象物を区別していったのであった。その事実が「神のかたちとして彼を創造し... (...in the image of God He created him;...)」という表現としてここに提示されているのである。人は対象物を認識して認知した瞬間、すでに、その対象物を区別する能力も兼ね備えていた。ここで「神 (God)」である主語と、動詞である「創造した (created)」を語源的に数秒間ほど見てみると、(1) の例文においては「神

(God)」のヘブライ語は“*elohim*”であり、複数名詞であるが、「創造した (created)」はヘブライ語では“*bara*”で単数動詞として使用され、主語である複数名詞と動詞である単数動詞がそこでは文法的に一致した形で使用されていると指摘されているが、その指摘文は下記の通りである。尚、日本語訳文は拙著が便宜上訳出しておいた。

- (3) a. ヘブライ語で「神」という語は“*elohim*”であるが、これは複数形名詞であり、創世記 1 章 1 節において「創造した」という動詞が使われており、ヘブライ語では単数扱いの数動詞としての“*bara*”で、これが文法的に一致として使用されているのである。
- b. The Hebrew word for God is ‘*elohim*, a plural noun. In Gen.1:1 it is used in grammatical agreement with a singular verb *bara*’ ... “created.”⁸⁾

上記例文の主語の複数名詞と動詞の単数形の不一致が、文法的に使用されて不合理的合致としての事実が存在する事を認める事によって処理される。即ち三位一体で各一位は単数とするならば主語の単数は成立しないであろうか。動詞を加えて文書化するならば“A trinity God created him.”とはならないであろうか。次に、成人女性が成人男性のあばら骨を素材にして造られたのであった。これを第二の人と呼ぶ事もできるのである。土の塵から造られた人間という時点から遡って、「初めに」という出発点に至るまでの経過をたどるという論理思考は細目から大項目への思考方法であるが、思考の起点は具体から原理原則へと到達する帰納法的論理思考でもある。他方「初めに」を起点とすると、原理原則から中項目、細項目へ至る演繹法なのである。聖書日本語と英語における創世記においては、演繹方法の論理思考が要求されるのである。また同時に具体的事象が発生しているので、それら具体的事象に対しても深く考察しながら吟味の目を向けなければならない帰納法的論理思考も要求されるのである。

2. 動詞への執着

それでは基本資料における動詞の配置とその役割は、どのようなものであったか考察して見たいと思う。初めに第一の人が使用した最初の動詞は“call”であった事が推測されるのである。具体的に基礎資料またはテキストの中で使用されている動詞の実態を調べてみた。調査方法は準動詞も含めて、聖書言語である日英語の中に使用されている動詞の文をすべてカードに書き出していった。その際、一つの文に複数以上の動詞が使用されているのは過去の経験からあらかじめ予想される事であったので、同じ文を一枚一枚カードに書きだしていった。ここで言えることであるが、単数の動詞が使われている文は、複数以上の動詞が使われている文と比較すると少なかった。一つの文に複数以上の動詞が使われているものが圧倒的に多かった。これは資料から導き出される特徴であるが、聖書言語という事で宗教的要素の語彙などの使用は免れないだろうと予想したのであるが、その予想に反して極めて日常的な事象が起きていた事は驚きの連続であった。ここで重要なことは内容的な事柄である。具体的には、時間の経過と共に、どういう動詞がどのような状況の下に使用されるのかという点である。場面において使用された動詞が、主体者または動作者、これは普通、主語 (subject) とよばれているもので、動詞 (verb) によって主体者である主語は支配されるのであるが、その動詞が自動詞

(intransitive) なのか、他動詞 (transitive) なのか、あるいは二重目的語他動詞 (ditransitive)・授与動詞 (dative verb) なのかは、文の中にあっては極めて重要なのである。理由は文の中にあって動詞は中心的役割を演じているものの、人間の思考と感情は動詞のみだけでは、完全に表現できるものではないからである。次の例文は基礎資料以外の資料から採り出して、ここに提示してみるのものであるが、その意味は極めて解りやすい意味内容をもった文である。(ちなみに基礎資料以外資料をここでは、間接的資料と呼ぶことにする。) 尚、日本語の表記は拙著が便宜上付しておいた。

- (4) a. (考えられる日本語の一例として) あなたに話そうと思っています。
 b. I'm going to tell you a story. ⁹⁾

上記例文において下線部が動詞部分であるが、この文の重要箇所ははたして動詞部分のみであろうかという問題点である。下線部 “am going to tell” の原型は “be going to tell” であるが、下線部は将来のことを含んでいるものの、“I will tell you a story.” との決定的な違いは、話す予定はあるものの “will” のように強い意志はもっていないという事である。「話す機会を逸したら話さないことだってあるのかもしれないよ」程度の意味なのである。“I will tell you a story.” は「強く意識しながら話す予定です」という意味に解釈できるのである。但し両者ともどのような内容を話すのか、いろいろ議論をよぶ箇所である。理由は “a story” が多義性を含んでいるからである。英語ではこれを “ambiguity” 又は “polysemy” といっている。従って例文の意味は幾つかに解釈できる。それらは、「ちょっとした話がある」のか、あるいは「なにか物語そのもの」を話すのか、あるいは「何かある事実」を伝えたいのか、あるいは「劇の話の筋」を話したいのかどうかというような事である。文法的観点から述べれば、未来に関して言っているものの、“will” とは対照的に色々変化と多様性に富んでおり、“be going to” は準法助的動詞でもあるといえる。そうしてもう一つ見逃してはならない点は、この形は予定を表わしてはいるが、“go” の形の進行形ではないというものの、いまだに現在分詞 “going” の意味を残していると言えるのであろう。換言すれば、例文においては、状態動詞である “be 動詞” の後に “going” が使われているが、意味的には進行・予定を表わしており、文法的には動詞の現在分詞で持続相 (durative aspect) と反復相 (iterative aspect) と進行相 (progressive aspect) を示し、本来的に “be going to” は “will” や “shall” に伴っている意志・義務の観念を排除し、純粹に未来だけを示す語句として発進したのであったが、機能変化を起こして、話者の意志も示すようになったのである。¹⁰⁾ 従って現代英語では、話し手側の意思決定の過程に (in the decision-making process) 基づく未来の事柄に関して言及する時の用法とみなされるのである。未来と言っても、ごく近い 24 時間以内の未来から 24 時間以降の未来まで千差万別なので、幅のある時間と考えるのが適切である。さらに現在分詞の “going” は、分詞という概念から発生したのであるが、語源的にはギリシャ語の *metokhe* が起点となって、ラテン語に翻訳され *participium* となり、14 世紀頃ラテン語からフランス語に入って *participle* となり、フランス語から英語に入って “participle” となって、ギリシャ語の英語の意味は “a part-taking” であり、本来的にはギリシャ語から発生した語彙である。ある英語の辞書は、その語源はラテン語としているが、それは正確さを欠いている事になる。分詞は基本的には非定形の動詞形態で二種類ある。一つは現在分詞で、他のもう一つは過去分詞ま

たは受動分詞である。現在分詞の型は、動詞“*ing*”で、“*going*”は現在分詞型に入る。文法的には助動詞の“*be*”と結びついて、進行的継続の概念を表わすのである。¹¹⁾ 現在分詞“*going*”の原形は“*go*”であり、動詞の活用変化 (conjugation) によって“*ing*”語尾を持つ現在分詞となったのである。この時点で現在分詞は準動詞 (verbal/verbid) となるのである。この分詞は三つの性質を有するところから動詞 (verb)、動詞的形容詞 (verbal adjective)、動詞的副詞 (verbal adverb) と呼ばれる事もある。しかしながらこれらの呼称は、分詞の用法のある一面のみに焦点を合わせているので、必ずしも完全な呼称となっていない事も事実である。従って“*I am going to tell a story.*”における“*go*”から派生した“*going*”の意味は、「動作・心構えなどをする」とかあるいは、「動作・心構えなどをしている」または、「動作・心構えなどをしている状態にある」事になり、前置詞“*to*”は「予定」を表わす記号であり、動詞“*tell*”を予定化させてしまう機能を有している語彙と言えるのである。統語論的には動詞“*tell*”は、前置詞“*to*”と結びつく事によって、文の第二構成部分である述語部の動詞部分を構成し、それが(動詞“*tell*”が)準法助的動詞未来概念と結合する事によって“*am going to tell*”と表記されて、未来時制となり、意味論的には予定意味理論の範疇に入り、逐次的語義表記は「話す予定になっている」となり、“*to*”の役割は“*tell*”と結び付いて、“*to tell*”となって“*tell*”を不定詞化させているのである。不定詞化させるというのは、“*tell*”の統語論的機能と意味論的原義を変化させ、“*tell*”を“*telling*”に、意味は「現在話している」と「これから話す」の二義に分けているのである。従って英語の“*be going to*”は助動詞化が確立していると言っても差支えないであろう。恐らく“*be going to*”の助動詞化への達成率は90%を超えていると思われる。但しその達成率は100%には達していないのである。(原沢正喜著、「現代英語の用法大成－資料・解釈・評価－」[東京：大修館書店、1979]、pp.445-446)。ここで“*I am going to tell you a story.*”から派生させて、“*be going to*”の部分“*shall*”に入れ替えてみると、“*I shall tell you a story.*”となり、その意味は予定表現に加えて「私はあなたにこれからぜひお話しておきたい事があります。」という強い意志表示に変化するるのであるが、これは予定表現理論に新たに強意表現理論が加わったのである。これは多義性 (polysemy) 理論に基づく多義語 (polysemy word) の範疇に“*shall*”も入っているという事である。しかしこの強意表現は、余り使われないで“*I will tell you a story.*”の方が一般的表現になってくるのである。この場合“*shall*”よりは若干弱い表現となるものの、“*am going to*”程度の単なる予定ではなく、将来どういう事が起ころうとも「話す意志だけはあり、話さないなんていう事はありませんよ。」という意味になる。そうしてこれらの“*shall*”及び“*will*”の中にも予定表現理論は潜在化されているのである。さらに“*I am going to tell you a story.*”から派生させる事が出来る動詞部分の本動詞の準動詞“*to tell*”を“*ing*”形の準動詞に変化させて、動詞・形容詞的機能を持った“*telling*”にして、統語論的には補語機能にする事によって、予定進行を表示する事が現代英語には多々みられるが、それは“*be going to do*”の短縮形として“*be doing*”にも、意志表示用法として使用されるようになったのである(原沢正喜著、前掲書)。従って、“*I am going to tell you a story.*”は、“*I am telling you a story.*”へと変化させる事が出来るが、この表現は口語的用法の一つであるという認識が要求されるのである。

3. 動詞の具体的使用例文と幾つかの解説

次に動詞が具体的に使用されている例文にあたってみる事にする。動詞を対象とする場合、当然な事であるが準動詞も含めて基本資料にあたって、その資料で使用されている動詞を、基本的には日英両国語の比較の観点からと英語学及び意味論などの角度から考察を試みる事にする。W. Nelson Francis は言語をつぎのように定義している。「言語は社会生活を営むための道具として、人間の集団によって使われる恣意的な明快な音の仕組みである (A language is an arbitrary system of articulated sounds made use of by a group of human as a means of carrying on the affairs of their society.)¹²⁾」としている。ここで述べている恣意的な明快音の仕組みとは、話ことばの事をさしていることは明白であり、言語はある一定の構造体を有している事を意味している事は明らかである。ある一定の構造体というのは、その言葉の文法である。文法というのは記述言語の構造的な要素であり、標準的な言語の統語論と言語の形態から見出されるある一定の規則を指すのである。この中には当然日本語・英語を母国語とする人の言語の形態論や統語論の仕組みについてもその範疇に入ってくるのである。従って文法研究の対象は話し言語・記述言語の具体例を取り扱いかいながらの統語論と形態論の研究であり、具体例を伴わないものは対象外となる。それでは資料における動詞を具体的に考察してみたいと思う。資料において使われた英語の動詞は次の順序であった。

- i. 1.hear, 2.saying, 3.has taken(away), 4.has taken (away), 5.was, 6.belonged(to), 7.has made, 8.has made
- ii. 9.saw, 10.behold, 11.was(not),
- iii. 12.said(to), 13.return(to), 14.will be, 15.will be,
- iv. 16.sent, 17.called,
- v. 18.said(to), 19.see, 20.is(not), 21.has been(with), 22.has been (with),
- vi. 23.know, 24.have served, 25.have served,
- vii. 26.has cheated, 27.has cheated, 28.(has) changed, 29.did (not) allow, 30.did (not) allow, 31.(to) hurt, 32.spoke, 33.shall be, 34.shall be, 35.brought(forth), 36.speckled, 37.spoke, 38.shall be, 39.shall be, 40.brought(forth), 41.striped,
- viii. 42.has taken, 43.has taken, 44.has given, 45.has given 46.(it) came(about), 47.were mating, 48.were mating, 49.lifted(up), 50.saw, 51.behold, 52.were mating, 53.were mating, 54.were striped, 55.were striped
- ix. 56.said(to), 57.said, 58.am,
- x. 59.said, 60.lift(up), 61.see, 62.are mating, 63.are mating, 64.are striped, 65.are striped, 66.have seen, 67.have seen, 68.has been doing, 69.has been doing, 70.has been doing,
- xi. 71.am, 72.anointed, 73.made, 74.arise, 75.leave, 76.return, 77.answered,
- xii. 78.said(to), 79.do, 80.have,
- xiii. 81.are (not) reckoned, 82.are (not) reckoned, 83.has sold, 84.has sold, 85.has... consumed, 86.has...consumed,
- xiv. 87.has taken(away), 88.has taken (away), 89.belongs(to), 90.do, 91.has said, 92.has said,

- xv. 93.rose, 94.put... (upon),
 xvi. 95.drove (away), 96.had gathered, 97.had gathered, 98.to go,
 xvii. 99.had gone, 100.had gone, 101.to shear, 102.stole, 103.were, 104.deceived, 105.
 (not) telling, 106.was fleeing, 107.was feeling, 108.fled, 109.had, 110.rose,
 111.crossed, 112.set... (toward),
 xviii. 113.was told, 114.was told, 115.had fled, 116.had fled,
 xix. 117.took, 118.pursued, 119.overtook,
 xx. 120.came (to), 121.said (to), 122.be (careful), 123.do (not) speak, 124.do (not)
speak
 xxi. 125.caught (up), 126.had pitched, 127.had pitched, 128.camped,
 xxii. 129.said (to), 130.have...done, 131.have...done, 132. (by) deceiving, 133.carrying
 (away),
 xxiii. 134.did.flee, 135.did...flee (away), 136.deceive, 137.did (not) tell, 138.did (not)
tell, 139.might have sent (away), 140.might have sent (away), 141.might have
sent (away),
 xxiv. 142.did (not) allow, 143.did (not) allow, 144.to kiss, 145.have done, 146.have
done,
 xxv. 147.is, 148.to do, 149.harm, 150.spoke, 151.saying, 152.be (careful), 153. (not) to
 speak,
 xxvi. 154.have...gone (away), 155.have...gone (away) 156.longed, 157.did steal,
 158.did steal,
 xxvii. 159.answered, 160.said (to), 161.was, 162.said, 163.would take, 164.would take,
 xxviii. 165.find, 166.shall (not) live, 167.shall (not) live, 168.point (out), 169.is, 170.take,
 171.did (not) know, 172.did (not) know, 173.had stolen, 174.had stolen,
 xxix. 175.went (into), 176.did (not) find, 177.did (not) find, 178.went (out),
 179.entered,
 xxx. 180.had taken, 181.had taken, 182.put, 183.sat(on), 184.felt(through) 185.did(not)
 find, 186.did (not) find,
 xxxi. 187.said (to), 188.let (not) ...be (angry), 189.let (not) ...be (angry), 190.cannot
 rise, 191.cannot rise, 192.is, 193.searched, 194.did (not) find, 195.did (not) find,
 xxxii. 196.became, 197.contended, 198.answered, 199.said (to), 200.is, 201.is, 202.have
 pursued, 203.have pursued,
 xxxiii. 204.have felt (through), 205.have felt (through), 206.have...found, 207.have...
found, 208.set, 209.may decide, 210.may decide,
 xxxiv. 211.have been (with), 212.have been (with), 213.have (not) miscarried,
 214.have (not) miscarried, 215.have...eaten, 216.have...eaten,
 xxxv. 217.was torn, 218.was torn, 219.did (not) bring, 220.did (not) bring, 221.bore,
 222.required, 223.stolen, 224.stolen,
 xxxvi. 225.was, 226.consumed, 227.fled (from),
 xxxvii. 228.have been, 229.have been, 230.served, 231.changed,

- xxxviii. 232.had not been (for), 233.had (not) been (for), 234.would have sent (me) (away),
235.would have sent (me) (away), 236.would have sent (me) (away), 237.has
seen, 238.has seen, 239.rendered,
- xxxix. 240.answered, 241.said (to), 242.are, 243.are, 244.are, 245.see, 246.is, 247.can (I)
do, 248.can (I) do, 249.have borne, 250.have borne,
- xl. 251. become, 252.let (us) make, 253.let (us) make, 254.let (it) be, 255.let (it) be,
- xli. 256.took, 257.set (it) up,
- xl.ii. 258.said (to), 259.gather, 260.took, 261.made, 262.ate,
- xl.iii. 263.called, 264.called,
- xl.iiii. 265.said, 266.is, 267.was named, 268.was named,
- xl.v. 269.said, 270.watch, 271.are (absent),
- xl.vi. 272.mistreat, 273.take, 274.is (with), 275.see, 276.is,
- xl.vii. 277.said (to), 278.Behold, 279.behold, 280.have set, 281.have set,
- xl.viii. 282.is, 283.is, 284.will (not) pass, 285.will (not) pass, 286.will (not) pass, 287.will
(not) pass,
- xlix. 288.judge, 289.swore,
- l. 290.offered, 291.called, 292.ate, 293.spent,
- li. 294.arose, 295.kissed, 296.blessed, 297.departed, 298.returned (to)

左側の小文字のローマ数字は資料の各節を表わしている。アラビア数字は使用されている動詞の総数を表わし、英語の表記文字は資料で使われている動詞そのものを示している。以上のように、基礎資料においては準動詞、機能動詞を含めて総数で 298 の動詞が使用されていた。これらの事から、資料の記述英文は全部で 55 節あるので、使用されている動詞の個数で割ると 1 節あたりの平均動詞個数が出てくるのである。それを実際に割ってみると、公式は、 $298/55$ となり、その数字は 5.4 という数値が電卓によってはじき出されたのである。つまり 298 の動詞個数を 55 の節に振り分ける事によって 1 節当たりの平均使用動詞個数が出てくるのである。5.4 という数値が 1 節当たりの平均使用動詞個数である。この数値を主語との関係でみると、主語は平均して 5 回の動作またはある何らかの状態を作り出したことになる。連結動詞である BE 動詞は、英語において基本的に「状態」を表わし、連結動詞以外は動作主である主語の「動作」又は「動き」を表わしているのである。ここで状態動詞の回数と使用されている箇所を引き出すことによって、動作動詞の回数と動作動詞がどこで使われているのかという事が把握できるのである。それでは主な連結動詞が使われている場所とその回数をここに引き出してみることにしてみると、次のようになった。

4. 連結動詞について

- | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|---------------------------|
| ① i-5, was, | ② ii-11, was (not), | ③ iii-15, (will) be, |
| ④ v-20, is (not), | ⑤ v-22, (has) <u>been</u> (with), | ⑥ vii-34, (shall) be, |
| ⑦ vii-39, (shall) be, | ⑧ viii-47, were (mating), | ⑨ viii-52, were (mating), |
| ⑩ viii-54, were (striped), | ⑪ ix-58, am, | ⑫ x-62, are (mating), |

- | | | |
|------------------------------------|---|---|
| ⑬ x-64, are (striped), | ⑭ x-67, (has) <u>been</u> (doing), | ⑮ xi-71, am, |
| ⑯ xiii-81, are (not) reckoned, | ⑰ xvii-103, were, | ⑱ xvii-106, was (fleeing), |
| ⑲ xviii-113, was (told), | ⑳ xx-122, be (careful), | ㉑ xxv-147, is, |
| ㉒ xxv-152, be (careful), | ㉓ xxvii-161, was, | ㉔ xxviii-169, is, |
| ㉕ xxxi-189, (let not…) be (angry), | ㉖ xxxi-192, is, | ㉗ xxxii-200, is, |
| ㉘ xxxii-201, is, | ㉙ xxxiv-212, (have) <u>been</u> (with), | ㉚ xxxv-217, was (torn), |
| ㉛ xxxvi-225, was, | ㉜ xxxvii-229, (have) <u>been</u> , | ㉝ xxxviii-233, (had) (not) <u>been</u> (for), |
| ㉞ xxxix-242, are, | ㉟ xxxix-243, are, | ㊱ xxxix-244, are, |
| ㊲ xxxix-246, is, | ㊳ xl-255, (let) (it) <u>be</u> , | ㊴ xliv-266, is, |
| ㊵ xlv-267, was (named), | ㊶ xlv-271, <u>are</u> (absent), | ㊷ xlvi-274, is (with), |
| ㊸ xlvi-276, is, | ㊹ xlviii-282, is, | ㊺ xlviii-283, is. |

まるで囲まれた数字は頻度数を表わし、アラビア文字は全動詞一覧表で何番目に使用された動詞であるかを表わしている。それは各節ごとに番号を付しているものである。①から④までの数字の意味は、全部で55節迄の中の何番目に連結動詞が使われている事を示していると同時に、45個の連結動詞が使われている事を示している。この数字を全体の298から連結動詞の45を差し引くと、253という数字が示されるが、この意味は連結動詞以外の一般動詞の個数が253である事を示している。これらの数字を通して、この両方の数字から連結動詞と連結動詞以外の一般動詞の使用比率を導き出す事ができるのである。即ち全体の298の動詞使用がされているなかで、連結動詞の45は、45回という連結動詞使用比率の公式は $45/298 \times 100$ という事であるから、全体における電卓の計算による対一般動詞比率は15.1006711%となる。従って一般動詞対連結動詞の比率の考え方は100.0000000から連結動詞の比率の数値を差し引くか、あるいは $253/298$ に100の数値を乗ずる事によって、その比率が出てくるのは周知の通りである。前者の式に従ってその比率を導き出すと、84.8993289%という数字が出てくるが、この数字はそのまま、資料における一般動詞の対連結動詞の使用回数(頻度)比率となっていくのである。今度は $253/298$ に100の数値を乗ずると84.8993288%という数値が出てくる。今度は前者の数値%から後者の数値84.8993288%を差し引くと、前者と後者の数値にわずかな違いが出てきている。その差は、0.0000001であり、前者の計算方式による数値が僅かに上まわっている。この僅かな差は、僅かな数値差として安易に無視してしまう理由はどこにもないのである。一般的にこの数値は顧みられないほどの僅かな差であるが、これを21世紀における英語を母国語とする人口に当てはめてみると、アメリカ合衆国は約3億人、イギリスが6千70万人、オーストラリアが2千75万人、ニュージーランド400万人で、カナダ600万人、その他がおおよそ4億人で意外と少ない人口である。しかし英語を公用語・準公用語として使っている人口は約15億以上と言われている。現在約世界の人口は、アメリカ総務省の推定によると約65億人を突破したと伝えられている。従って約4人に1人の割合で英語と関わり合いを持っていると推測されている。4人に1人というのはおおよそ1,500,000,000(15億人)になる。この数値を、先ほどの一般動詞と連結動詞の使用頻度の比率を出した時に出た0.0000001の数値で、世界の英語と関わり合いを持っている人口を乗じて見るとその数値は15,000である。従って先ほどの数値0.0000001は僅かな数値であったが、その数値を世界の色々な人口との関係に照らし合わせて応用してみると決して軽視出来ない数値になってくるのである。その理由は、

15,000/6,500,000,000 は 0.00002307 という数字が割り出されて 0.002307% という比率が示される。15,000 人という意味は世界中に数多くある言語の中で英語を公用語とする人間の数から見れば、決して侮れない数値であり、この 15,000 人を英語公用語人口の 1,500,000,000 との比率では 15,000/1,500,000,000 となり、その数値は 0.001% となる。1,500,000,000 は「多数」を表わす数値であり、15,000 という数値は「少数」であるから、その少数は見捨てる（abandonment）という概念に安易に飛びつく危険性が存在するのである。日本でもアイヌ語を母国語とする人達が如何に切り捨てられてきたかは、日本の過去の歴史が如実に物語っている事実が存在するのである。この「少数」を安易に切り捨てるという考え方は人間の「負」の部分であり、暗黒の部分でもある。言語の世界において、「多数」という “major” な概念が「少数」という “minor” な概念を淘汰するという事態が、過去の歴史においてなされてきたことは否定できない事実であるが、それは「少数派」言語の文化的遺産を暗闇に葬り去ってきた「多数派」言語文化の罪と驕り以外の何物でもない歴史的事実なのである。しかし、一方、過去の歴史において「多数派」言語が世界を席卷し、隆盛を極めたにもかかわらず、現在は世界の公用語としての立場を失った言語も存在する事も確かであり、またその言語の痕跡すら皆無であるにもかかわらず、その言語が過去の歴史において存在したという事実も見逃せないのである。これを客観的に提示している記録書は唯一聖書のみである。その聖書には次のような記事が記されている。

And the whole earth was of one language, and of one speech. And it came to pass, as they journeyed from the east, that they found a plain in the land of Shinar; and they dwelt there. And they said one to another, Go to, let us make brick, and burn them thoroughly. And they had brick for stone, and slime had they for mortar. And they said, Go to, let us built us a city and a tower, whose top may reach unto heaven; and let us make us a name, lest we be scattered abroad upon the face of the whole earth. And the LORD came down to see the city and the tower, which the children of men builded. And the LORD said, Behold, the people is one, and they have all one language; and this they began to do: and now nothing will be restrained from them, which they have imagined to do. Go to, let us go down, and there confound their languages, that they may not understand one another's speech. So the LORD scattered them abroad from thence upon the face of all the earth: and they left off to built the city. Therefore is the name of it called Babel; because the LORD did there confound the language of all the earth: and from thence did the LORD scatter them abroad upon the face of all the earth. (Gen.11:1-9, *KJV*.)

上述の英語の題目は “*Universal Language, Babel, Confusion*” であり、その要旨は、拙著の「英語と日本語－その意味論的比較」（馬場熙著、南窓社、1993 年）に述べられているが、「言葉の混乱」という表現がその内容と一致するのである。ノアの大洪水からバベルの塔の建設までは相当の時間がたっているに違いないのである。文脈上の意味という見地から見れば、「言語の混乱」という語句は、意志疎通が不可能になってしまったということを意味している。天にまで届く高い塔を建てようとする企ては、人間の集団と協力の驕り以外の何ものでもないのである。神のようになりたいと思ったアダムとイヴの不従順は原罪をもたらし、人々がその後

を追っていった。かつてないほどの墮落がアダムとイヴの原罪以来人類の上に広がったが、これほどの墮落は人類の創造いらい今だかつてないほどひどいもので、これからもないであろうし、またこの墮落が原因でノアの大洪水を呼び込んでしまったのである。大洪水によってノアとその家族を除いた人類が減ぼされた後、人々の傲慢さという大きな罪と過ちが、言語の拡散を起し、多言語の始まりとなった (The main point in these sentences is the expression “the confusion of the language.” The time that elapsed from the great flood of Noah to the building of the Tower of Babel might be very lengthy. From the contextual point of view the phrase “the confusion of the language” means the impossibility of communication. Attempting to make a Tower higher to reach the heavens signifies nothing but a disgraceful of growing and corporate egotism. Men continued in sin caused by the original disobedience of Adam and Eve, who wanted to be like God. The original sin of Adam and Eve caused the spread of corruption among the hearts of men and women and can be seen as a direct cause of the great flood. After the destruction of all mankind, the pride of mankind caused the scattering of the language. This is the beginning of all kinds of languages in the world.)。

上述の記録及び拙著の要旨によれば、人間は意志疎通の方法としてたった一つの言語しか使っていなかった事が判る。しかしながら、人間は意志疎通の道具として賦与された唯一の言語を悪用して宇宙の統治者に反逆の思いを抱き、自分たちの名前を高く上げようと試みた結果、取り返しのつかない事をしてしまい、その事を思い知らされたのであった。それは今まで使用していた唯一の言語のみでの意志疎通は不可能になってしまったのである。その過程は一極集中から多極化という唯一言語から多言語への道であった。そのきっかけは言語賦与者への叛逆がその契機となったのである。Windows Internet Explore の Google ウェブ上の「少数言語をめぐる 10 の旅」(大角翠編著、三省堂、2003 年)によると、現在世界中には約 6,000 ~ 7,000 以上、さらに上乘せして約 8,000 の言語の数があると指摘されており、世界の言語の大半は万人にも満たない少数民族によって話されていて、近年までその存在すら知られていなかったものが多いとされている。さらに英語のように大言語がある一方、ほんの少数の話者だけに理解されているような小言語もあり、どんな言語といえども、常にその言語が話される社会の変化と無縁ではありえないと、述べている。

5. 動詞の意味について

次に、基礎資料にある動詞が使用されている例文にあたって見て、その構造と意味について述べてみたいと思う。すべての例文を引用してそれらに考察を加える事は紙面の都合上割愛するが、若干の例文に対して日英比較語の立場から検討・考察を試みしてみる事にする。

連結動詞 “am” についてみると、2 文例が資料にはあった。それらは次の通りである。

- (5) a. そして神の使いが夢の中で私に言われた。「ヤコブよ。」私は「はい」と答えた。
(創,31:11)
- b. “Then the angel of God said to me in the dream, ‘Jacob,’ and I said, ‘Here I am.’ (Gen.31:11)

日本語の「はい」の意味は、あらたまって、または承諾の意味を表わして応答する語で、「そうです」の意味である。「そうです」の品詞は感嘆詞である。英語の“Here am I.”は、教室などで、英語で教師が学生の出席をとる場合に、学生が返事をするときの慣用句であり、自己の存在を表明する表現でもある。“I am here.”の倒置表現になっている強意語でもある。基本的には副詞強意型主語存在表現である。連結動詞“am”から判断できるが、“am”は単数の動詞であり、動詞の主語の人称は、1人称なので、結論として主語は、1人称単数であることがわかる。

- (6) a. わたしはベテルの神。(創.31:13)
b. 'I am the God of Bethel,... (Gen.31:13)

日本語の例文では動詞が使用されていないが、正式には「わたしはベテルの神です」となり、日本語は「動詞」が省略(潜在化)されていても、意味が通じる動詞省略型の言語である。従って「以心伝心」が働く言語であると同時に、(6) aの例文は動詞省略型肯定日本文という事になる。英語“am”は述部の補語の部分の主格補語と主語を結びつける機能語となっている。従って“I”と“the God of Bethel”は等位関係になっている。典型的な主部・述部等位関係の英語表現である。例文(5)の表現と同じ理論に基づき、英語の動詞から主語は第1人称単数であると判断できる。

- (7) a. 「群れにかかっている雄やぎはみな、しま毛のもの、」(創.31:12)
b. ...all the male goats which are mating are striped,... (Gen.31:12).

日本語の動詞部分の意味は、物事に関係してくるという意味での合流か、あるいはヤギどうしが群れに合流をはじめる意味にもとれる。英語はその点ははっきりしている。英語の動詞部分“mating”とは「かけ合わせる」の意味で、「つがい」になるという意味がある。日本語の「かけあっている」は雄やぎに文字通りかかる形容詞的働きをしている。一方英語は「雄ヤギを関係代名詞で受けて、それを連結動詞で繋いで、さらに短い関係詞節全体が“striped”という動詞の過去分詞から変化した形容詞表現に対して主格の役割を演じて、連結動詞は繋ぎの役を演じさせている典型的な二重構造になっている。即ち全体的な主語と述語関係の中でもう一つの小さな主語と述語関係を有している節であると言える。

一般動詞については、“arose”と“put”を採り上げて、次の例文を提示する。

- (8) a. そこでヤコブ立って、彼の子たち、妻たちをらくだに乗せ、... (創.31:17)
b. Then Jacob arose and put his children and his wives upon camels;...(Gn.31:17)

日本語の「たって」は、「立ち上がって」の意味で、それらの原型表現は「立つ」である。「て」は広辞苑によれば、上の語句を受けて下の語句を並列して結びつける役をする接続助詞であるとしていて、時間的に続く意を表す場合の例文として、記^下(古事記下巻)より引用して「出で立ちてわが国見れば」を提示している。¹³⁾この原理に従えば、「立って」は、「立つ」に「て」

を加えて「立って」になるという事になる。それを公式化するならば、「立つ＋て＝立って」という事になる。「乗せる」は前後関係から、「自分の肉親や妻たちを動物に乗せた」ということになる。従って、(8) a の例文の日本語の上の語句の動詞は、「立って」であり、下の語句の日本語の動詞は「乗せ」になる。広辞苑の引用文の例に倣えば、「立って、彼の子たち、妻たちをらくだに乗せ」となる。この部分の英語による解説は、次の解説文が適用されるであろう。

The *te*-form functions, in part, to link sentences. That is, if the last element of the predicate of a clause is the *te*-form, it means that that clause is not the end of the sentence and that another predicate or clause follows it.¹⁴⁾

一方英語は動詞が“arose”と“put”が使われている。英語の“arose”は、“arise”の過去時制であり、過去時制形態となって過去の行動を表示するのである。辞書的には次のように表現できる。

The preterit of the verb “arise” is “arose” which is the tense of verb form that expresses a past action or condition.¹⁵⁾

例文 (8) b は目的語の後に副詞が来ている動詞句分離型英文で、自動詞は前置詞などを伴って他動詞に変化するのである。行為者である主語の動作の順序は、最初に“arose”で、二番目の動作は“put somebody upon”である。主語の動作の順序は日本文・英文の構成上極めて重要なのである。理由は動作者または行為者は順序を入れ替えて動作をおこなったのではないからである。演繹法の手続き理論で述べるならば、前提として動作者、統語論観点からは文には主語が存在して、その主語は行為者で、当初からその行為者は主語と共に存在しているのである (In the term of syntax we can say that the subject (doer) is in the sentence. The subject is with the doer and the subject is the same as the doer in the sentence. From the very beginning the doer is with the subject in the sentence.)。

6. むすび

現在、世界には6,000～7,000の言語が存在する中で、日本語と英語の比較(対照)研究をするという事について、しばらくのあいだ目を閉じて黙想してみると、次の事が言えるのである。即ち、「日本語は世界中に数多くある言語の中の一言語である (Japanese is a language of many different kinds of languages in the world.)」英語も世界中にある数多くある言語の中の一言語である (English is also a language of all sorts of languages in the world.)」しかしながら日本語は英語と対比した場合、小言語 (a minor language) であり、英語は大言語 (a major language) である。日本語と英語の文法構造は全くちがっており、日本語は、動詞が文の最後に来る言語である。英語は、動詞が主語の直後に来る言語である。発音が全く異なる言語である。表記方法も全く異なる言語である。但し、共通の単語が存在する。日本語から言えばいわゆる借用語 (borrowed language) で、英語にも日本語からの借用語が見受けられる。日英語の比較(対照)研究というのは、極東アジアに位置する日本語文化と極西ヨー

ロッパに位置する英語文化との出会いでもあり、極東と極西とを仲介しているのが、インド・ヨーロッパ語族を数多く有しているユーラシア（Eurasia）大陸である。ユーラシアというのは“Europe”と“Asia”の混成語である。この混成語の理論に従って、東と西を英語で混成させた場合“WEAST”という混成語をつくり出して、その意味を「東西」とする訳にはいかなないのであろうか。従って「南北」は“NORSOUTH”にはならないのであろうか？「天地」は“HEAVENEARTH”又は“EARTHEAVEN”とはならないのであろうか？最後に日本語的英語として“JAPENGLISH”という混成語または新造語は認知されないものであろうか？

Notes/ 註

- 1) T. Janson, *Speak, a short history of languages* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2002), p.1, saying, “And out of the ground the Lord God formed every beast of the field, and every fowl of the air; and brought them unto Adam to see what he would call them; and whatsoever Adam called every living creature, that was the name therefore.
- 2) コリント人への手紙第一 14 章 10 節 /I Corinthian 14:10.
- 3) 旧約聖書、創世記 31 章、新改訳（東京：日本聖書刊行会、1972 年）[尚綱女学院 1973 年研究費登録番号 652、分類 193、出版名 N/S. Anderson, ed., *The Hebrew-Greek Key Study Bible*, Genesis 31. (NAS) (Chattanooga: AMG Publishers, 1977) . [NAS = New American Standard]
- 4) J. Stein and L. Urdang, ed., *The Random House Dictionary of the English Language* (New York: Random House, 1973), s.v. “logos.”
- 5) 古西友七、安井 稔、国廣哲彌、堀内克明編（1994）『ランダムハウス英和大辞典、第 2 版』小学館、「logos」の項目。
- 6) 前掲書、「word」の項目。
- 7) S. Anderson, *Ibid.*, p.1761.
- 8) *Ibid.*, for detailed discussion of this matter see p. 2 below.
- 9) F. R. Palmer, *The English Verb* (Essex: Longman Group, 1988) , p. 146.
- 10) 原沢正喜（1979）『現代英語の用法大成－資料・解釈・評価－』大修館、pp. 445-446.
- 11) T. McArthur, *The Oxford Companion to the English Language* (Oxford and New York: Oxford University Press, 1992) , s.v. “participle.”
- 12) W. N. Francis, *The Structure of American English* (New York: The Ronald Press Company, 1958) , p. 13.
- 13) 新村出編（1991）『広辞苑』岩波書店、「て」の項目。
- 14) S. Makino and M. Tsutsui, *A Dictionary of Basic Japanese Grammar* (Tokyo: The Japan Times, 1989) , p. 466.
- 15) D. Summers, *Longman Dictionary of Contemporary English* (Essex: Longman Group Ltd, 1998) , s.v. “preterite.”

